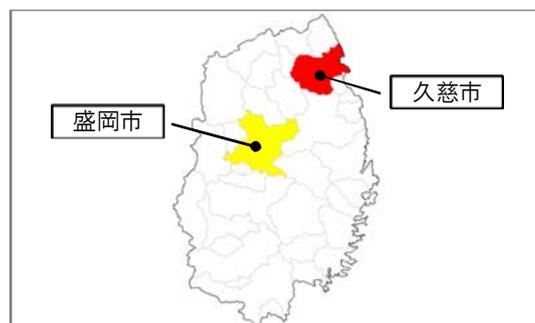


③ 岩手県久慈市山形町

a) 地域の概要

久慈市は、岩手県北東部の沿岸にあり、西側は遠島山など標高 1,000m 以上の山嶺を有する北上高地の北端部にあたる。東側は太平洋に面しているが、総面積 623.14km²のうち森林面積が 87.3%を占めている。



気象は、太平洋に面していることもあり、海洋性気候と内陸性気候の両方の気象状態を併せ持ち、夏季はヤマセ（偏東風）の影響を受けることが多く、平均して比較的冷涼な気候である。また、冬季は北西の季節風が強く、春先にはフェーン現象も見られる。

日照時間は比較的長く、年間を通して 1,000mm 前後の降水量と県内でも比較的少ないが、西側の山間部では多雪地域もあり、春先の大雪や晩霜により農作物が被害を受けることもある。旧山形村は、平成 18 年 3 月 6 日、久慈市との合併により消滅した。

○久慈市山形町の人口・産業等

表 旧山形村 旧久慈市 合併前後の人口・産業データ

項目	平成22年				平成12年			
	旧山形村	旧久慈市	久慈市	旧山形村の占める割合	旧山形村	旧久慈市	久慈市 ^(※)	旧山形村の占める割合
人口	2,804人	34,068人	36,872人	7.6%	3,382人	36,796人	40,178人	8.4%
15歳未満	10.3%	14.4%	14.1%	—	13.5%	17.5%	—	—
15～64歳	52.8%	60.1%	59.5%	—	57.6%	62.8%	—	—
65歳以上	36.9%	25.5%	26.4%	—	29.0%	19.4%	—	—
面積	295.49km ²	327.65km ²	623.14km ²	47.4%	295.49km ²	327.62km ²	623.11km ²	47.4%
産業就業者数	1,313人	14,969人	16,282人	8.1%	1,716人	17,225人	18,941人	9.1%
第1次産業	39.2%	7.2%	9.8%	—	38.1%	8.5%	—	—
第2次産業	22.2%	28.3%	27.8%	—	27.8%	34.6%	—	—
第3次産業	38.5%	64.3%	62.2%	—	34.1%	56.9%	—	—

※ 旧山形村と旧久慈市の合計
国勢調査データより作成

旧山形村の面積は、新久慈市全体の 47.4%と半分近くを占めているものの、人口密度は約 10 倍の開きがあり、旧山形村の人口は 2,804 人(久慈市の 7.6%)、また、この 10 年で 17%の減少している。産業就業者数を見ると、旧山形村の第 1 次産業就業者割合は 39.2%と最も高く、旧久慈市を約 32%上回っている。

農林水産業の基本指標

■ 面積

総土地面積	62,314 ha(4.1%)
耕地面積	2,900 ha(1.9%)
田耕地面積	813 ha(0.9%)
畑耕地面積	2,090 ha(3.6%)
林野面積	54,429 ha(4.7%)

■ 人口

総人口	36,872 人(2.8%)
農業就業人口	1,368 人(1.5%)
漁業就業人口	342 人(3.4%)

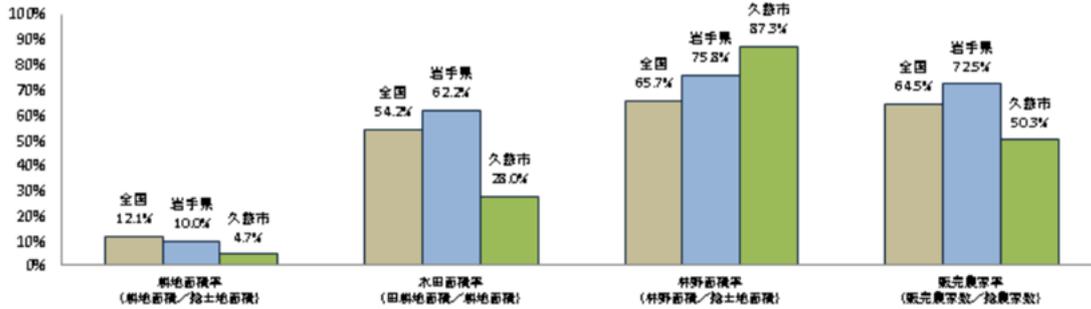
■ 世帯等

総世帯数	14,012 世帯(2.9%)
農業経営体数	896 経営体(1.6%)
総農家数	1,689 戸(2.2%)
自給的農家数	839 戸(4.0%)
販売農家数	850 戸(1.5%)
主業農家数	144 戸(1.3%)
準主業農家数	161 戸(1.0%)
副業的農家数	545 戸(2.0%)
林業経営体数	228 経営体(2.6%)
漁業経営体数	145 経営体(2.7%)

■ 地域

農業集落数	137 集落(3.8%)
農産物直売所数	12 施設(4.2%)
漁港数	10 港(9.0%)
漁船隻数	230 隻(2.6%)

注1:耕地面積、漁港数についてはH23年値、農業就業人口、漁業経営体数、漁船隻数についてはH20年値、その他はH22年値。
注2:()内は都道府県内でのシェア。

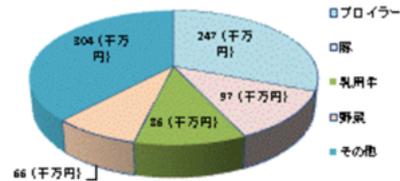


農業部門別の産出額・販売農家数

農業産出額	販売農家数
合計	800 千万円(3.1%) / 850 戸
耕種計	110 千万円(0.9%) / 254 戸
米	33 千万円(0.5%) / 9 戸
麦類	- / 31 戸
雑穀	1 千万円(2.3%) / 54 戸
豆類	5 千万円(3.7%) / 24 戸
いも類	2 千万円(3.2%) / 246 戸
野菜	66 千万円(2.5%) / 11 戸
果実	2 千万円(0.2%) / 15 戸
花き	1 千万円(0.2%) / 2 戸
工芸農作物	- / -
種苗・苗木類・その他	2 千万円(1.5%) / -
畜産計	689 千万円(5.2%) / 106 戸
肉用牛	54 千万円(2.6%) / 29 戸
乳用牛	86 千万円(3.8%) / 4 戸
うち生乳	78 千万円(3.9%) / -
豚	97 千万円(4.4%) / -
鶏	452 千万円(6.8%) / 1 戸
うち鶏卵	0 千万円 / 6 戸
うちブロイラー	247 千万円(5.8%) / -
その他畜産物	1 千万円(1.1%) / -
加工農産物	0 千万円 / -

注1:販売農家数についてはH22年値、農業産出額についてはH18年値。
注2:販売農家数の合計は実数、内訳は延べ数。
注3:()内は都道府県内でのシェア。

農業産出額の内訳



販売農家数(延べ数)

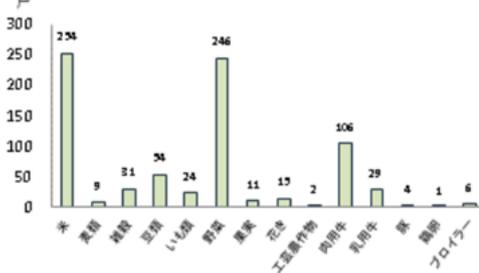


図 農産物の生産状況

b)久慈市山形町の地域食文化

ア.基本食(主食)

文献「聞き書 岩手の食事」によれば、「きびしい気象と山間部という自然の中で、たび重なる飢餓と闘ってきた県北では雑穀が食の基本」「水田が少なく畑作と焼畑耕作が主であり、県北の人々の主食は「ひえ」。地域の輪作は「ひえー小麦ー大豆」で行われ、焼畑の耕作を主としている地域では、あわ、そば、大豆が主食の役割を果たしていた。」とされている。

イ.まめぶ

身近かに手に入る各種野菜や焼き豆腐、くるみが用いられており、栄養上からも好ましい料理である。最近では年中、家庭の行事食として食べられており、久慈市の家庭料理として定着している。

昭和60年頃に「まめぶサミット」を開催。誰もが自分の作る「まめぶ」が一番だと思っているため、山形村の共通項は見いだせなかった。学校給食でも「まめぶ」が提供されている。

合併して以降、「久慈のまめぶ」と言われるが、「山形村のまめぶ」であるという誇りがある。月1回の料理教室で「まめぶ」の調理方法を教えている。若いお母さんたちにも調理方法を継承したいが、集まってくるのは50~60代の方々が15名ほどであり、旧山形村の方より、旧久慈市の方々の関心が高い。



まめぶ

※久慈市山形総合支所より

ウ.その他の郷土料理

○とうふ田楽

焼き豆腐ににんにく味噌をつけ、炭火で焼いたもの。

○べごの汁

山形村短角牛のスジやスネを煮込んで作った郷土料理。凍み豆腐を乱切りし、地味噌で味をつけたもの。イベント時に欠かせない。



豆腐田楽



べごの汁

※久慈市山形総合支所より

c) 取組の概要

ア. 地域農業のおもな歴史

昭和 30 年代	地域において酪農が開始される。これ以前より山形村短角牛の繁殖はおこなわれていた。
昭和 38 年	旧山形村において水稻栽培が開始される。それまでは雑穀(ヒエ・アワ・大豆・ソバ・麦)。旧久慈村においては炭作りが主な産業。
昭和 40 年代半ば	減反政策開始。添削奨励作物としてデントコーンの作付けが開始され、山形村短角牛の繁殖経営から、肥育までを含めた経営が増加する。
昭和 55 年	安全な食を求める流通業者への山形村短角牛の流通開始により、流通先が安定化。
昭和 56~57 年頃	地域内においても山形村短角牛が食べられ始める。
昭和 58 年	小笠原村長就任。平庭高原・日本短角牛・炭のアピールに着手。同年、山形村短角牛の消費者会員との交流開始。村民が自分たちの暮らしや価値観を見直すきっかけとなり、スローガンとして「交流からの村づくり」を掲げる。
平成 6 年	山形村短角牛の需要に追い付くため、山形村短角牛の加工品の製造、販売までを行う組織、(有)総合農舎山形村を発足。(山形村短角牛の生産は、肉牛の取引量の伸びが鈍化したことから加工製造からのスタート)のちに、村から大阪のデパートへ売り子となって販売を行うなど、産地から都市への交流も。
平成 17 年	国産飼料(100%)のみ給餌の短角牛の飼養を開始。100%は、山形村短角牛のみ。
平成 19 年 3 月	山形村短角牛で商標登録の認定を受ける。

イ. 山形村短角牛の生産について

○久慈市山形町における「山形村短角牛」の生産概況

全国の日本短角種の繁殖牛の 60.3% (2,663 頭) が岩手県で飼養されており、同じく全国の日本短角種の肥育牛は、41.2% (1,310 頭) が岩手県で飼養されている。岩手県内では、久慈市の飼養頭数が約 450 頭で 1 位、次いで盛岡市、岩泉町と続く。経年変化では、平成 3 年の飼養頭数 (繁殖牛 : 1,044 頭、肥育牛 : 742 頭) をピークに減少し、ここ数年は一定 (平成 23 年、繁殖牛 : 412 頭、肥育牛 : 274 頭)。繁殖牛の段階で長崎や茨城等へ流出している。

30 年続く産直契約により、肥育牛の 7 割を出荷している。また、「久慈市山形ベコツアー」や「やまがた村短角牛応援団現地交流会」を通し都市との交流を図るほか、オーナー制度「やまがた村短角牛応援団」の取組も行われている。平成 17 年より、飼料を完全国産化。

○日本短角種の概要

旧南部藩時代、沿岸と内陸を結ぶ”塩の道”の物資輸送に使われ、岩手を代表する民謡「南部牛追い唄」にも歌われた「南部牛」に、明治 4 年、ショートホーン種とデリー・ショートホーン種を交配して品質改良を重ねた末に誕生したのが「日本短角種」。黒毛和種の毛色が真っ黒なのに対し、日本短角種は濃赤褐色、和牛としては大型で、肉質は繊維が粗く、脂肪交雑も黒毛和種に比べて劣る。

日本短角種の最大の特徴は、粗飼料の利用性に富み、かつ北日本の気候・風土に適合している。また、放牧適性が高く、急勾配の斜面でも飼養が可能であり、粗放な放牧でも野草を採食する能力が優れている。夏期間は放牧し、冬期間はサイレージや乾草の給餌に手間がかからないという利点がある。



放牧された日本短角種

※いわて牛普及推進協議会ホームページより

南部牛道唄（岩手県民謡）
 田舎なれども サアハエー
 南部の国は サー
 西も東も サアハエー
 金の山 コーラサンサエー
 今度来るとき サアハエー
 持って来てたもりや サー
 奥の深山の サアハエー
 なぎの葉を コーラサンサエー

○飼養環境—エリート牧場について—

正式名称は「久慈市短角牛基幹牧場」。市の施設として設立、JA 新いわてが指定管理者となり、現在 105.5ha の土地で 120 頭が飼養されている。

農家から牛を預かり、夏山冬里方式によりこれを肥育管理。厳密には5月のはじめから10月の終わりにかけて放牧される。場内は自然交配・自然分娩で行われ、種雄牛の育成も牧場の目的の1つであり、この牧場で生まれた雄牛のうち適正のあるものを岩手県の畜産試験場で飼養し、山形町内の肉用牛繁殖農家に戻すという取組も行われている。



エリート牧場の様子 ※現地にて撮影

○山形村短角牛の生産流通の変化による活性化について

昭和 55 年頃、短角牛の従来型の生産・流通を続けていては先行きが暗く、黒毛和牛と比較すると短角牛の評価は低すぎで、短角牛の飼養から黒毛和牛の飼養へ切り替える畜産農家も居た。農家の中にも「流通は経済連に任せておけばいい」という消極的な意見もあったが、経済連以外への流通、販売を開始した。当時、後継者は減る一方であったが、安定的な流通ができたことで経済的に支えられた。

短角牛は赤身の肉は高齢者に好まれるヘルシーなものであったが、脂肪が黄色であり、肉質も固いなどイメージが悪かったが、販売と交流を通しイメージが変化。平成 17 年 10 月より、国産飼料だけの給餌での飼養を開始し、国産の飼料だけで育てるといった特異な飼養についても評価された。

BSE や O-157 の発生により、消費者の食品の安全性に対する意識が高まったことがターニングポイントの1つとなり、短角牛の価値が高まる契機となったが、平成 23 年から原発の風評被害で飼料が国産であることが逆風となっている。

○短角牛を活かしたメニュー作りについて

短角牛マン母ちゃんの会は、スジ肉やスネ肉の活用方法として、肉まんの生産を検討、道場六三郎にも相談した。女性や子供でもヘルシーに食べられることを目的に野菜を追加し、それでも 250 円を超えないように調整した。藤田観光(株)からの注文を受けたほか、久慈の観光物産市や祭りで取り上げられ、肉まん製造を続けている。6 名体制で 3 年が経過している。

ただし、あまり価値を下げて、「短角牛=B 級(ここでは、品格を下げるという意味で使用)」というイメージにはしたくないが、逆に手頃を買えないのも問題がある。※本来の B 級は、「手頃で安価な」という意味合いが強い。

○課題と対策

▶ 繁殖センターの整備

JA 新いわて肥育部会が整備・運営。JA が事務局

▶ 地域内購入価格を設定

(900 円/kg)し、評価購買の安定的な実施へ

▶ オーナー制度(短角牛応援団)の導入

1 頭あたり 6 名(一口)で、子牛の名づけや交流会への参加の権利

▶ 粗飼料多給飼養

慣行飼養の飼料費 293,471 円に対し、253,387 円に低減(13%)

飼料価格の高騰に耐えることができるほか、消費者の持つイメージが、黒毛和牛=栄養をたくさん与え霜降り(サシが多い)の牛であるのに対し、短角牛=赤みが多い肉(サシが少ない)で健康に育った牛として、ブランドイメージを明確化している。

飼料のうちデントコーン・乾草・わらは地元産で休耕田活用につながっている他、デントコーンは転作奨励作物とされている。

▶ 福島第二原発の放射能に関する風評被害

放牧して育てていることがマイナスイメージとなっているため原発事故当初から、ゼオライトの給餌等を試みているが、コストがかさむのは否めない。

▶ 消費拡大の必要性

地元で食べられる場所が少ない。また、販路も新たに開拓する必要がある。

▶ 素牛の確保に向けた第 2 繁殖センターの整備

ウ.都市農村交流の取組

○都市農村交流開始の背景

山形村短角牛を美味しいと食べていることを山形村短角牛の生産者に証明するため、山形村短角牛のバイヤーが消費者を連れて山形村を訪問したことを契機に都市農村交流を開始。都市の人たちをもてなすにあたり、何を食べてもらうか等の対応を考えていた。反省会を聞いたところ、漬物や手作りの料理など、あまり手のかからない地元のものが受け入れられていることがわかり、自分の地域の文化を見直すきっかけとなった。

○都市農村交流の受け入れ先について—バッテリー村の取組

「バッテリー」とは、沢からのわずかな流水を利用して石臼を搗き、雑穀を製穀、製粉することが出来る、大きな丸太をくり抜いた「獅子落とし」のような形の道具のこと。昭和 56 年、山形村短角牛の出荷先が固定化したことにより、昭和 58 年、その消費者との都市農村交流を開始する。

「ほどもち」(クルミと黒砂糖を包んだ手のひらサイズの小麦団子囲炉裏の中心の灰の中に埋めて加熱して食べる郷土料理)等の地域食でもてなした結果、地域文化を見直すきっかけとなり、「与えられた自然を生かし、この地に住むことに誇りをもち、一人一芸何かを作り、都会のあとを追い求めず、独自の生活文化の中から創造し、集落の共同と和の精神で生活用を高めよう」というバッテリー憲章を掲げ、昭和 60 年にバッテリー村を開村する。

岩手大学や東京農業大学の学生をはじめとして、県内外から多くの人たちが来村(来村者数不明)。ヤギやミニブタ、チャボ等の家畜を飼養し触れ合いの場を提供している。

リピーターは多く、旧山形村内、そして久慈市内へと交流の輪を広げ、意見交換などを通し、地域内に大きな刺激を与えている。中には料理研究家などもおり、山形村短角牛の調理法などを提案。レシピ集も自費出版されている。

久慈市が取り組む教育旅行もバッテリー村の活動が原型とされるほか、山形町内で取組んでいる農村民泊も、バッテリー村のグリーンツーリズムの精神が模範となっている。



バッテリー村の様子
※久慈市ホームページより



バッテリー村における都市農村交流の様子
※岩手県ホームページより

エ. 地域食材加工の取組

○総合農舎山形村について

平成6年2月1日設立。出資額4,000万円。旧山形村50%、旧陸中農業協同組合37.5%、流通業者1社12.5%の3者による第3セクター。

短角牛をはじめとして、地域で採れる安全な食材を中心にして、冷凍食品等の150アイテムを生産している。雇用は32名（職員5名、パート従業員27名）、全員地元から雇用している。

山形村短角牛を月に4頭（生体800kgから枝肉500kg）仕入れ、湯煎で食べられるハンバーグのほか、コロッケやグラタン等の冷凍食品、カレー等のレトルト食品を製造している。

現在、農舎では、繁殖牛を数頭使用しており、平成24年に6次化の取組として農水省の認定を受けている（地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律に基づいた総合化事業計画）。現在の売上高は2億円弱。



総合農舎山形村
※現地にて撮影

オ. その他一地域農業の特色と変化一

○きのこ林業について

本しめじが採れなくなった。見つけられる人も減ったし、きのこそのものも減ったように思われる。行者にんにくも減った。きのこが採れるようになるためには、山の手入れが重要である。

きのこが減った原因として、以前は広葉樹林地であった場所が造林地になったことが一因として挙げられる。山の手入れをする人が減少し、芝刈が行われなくなったことも原因である。

林業は盛んだが、これから先は50~60年先を見据えた林業ではなく、100年先を見据えた付加価値の高い林業にシフトしていく必要がある。そうすることで、チップになるのではなく、用材としての価値がある林業を経営することができる。

○はさがけについて

地域内の水田では、「はさがけ」（もみの天日乾燥）を多くみられるも、乾燥コンバインの普及により、はさがけ乾燥をおこなう生産者は減少している。乾燥前のコメの水分率により乾燥温度や時間を細かく調整できる乾燥機の登場や、子供を含む若い働き手の減少がその理由として挙げられる。